“スウェン・ヘディンと楼蘭王国展”に想う

矢 澤 大 二*

“Exhibition of Sven HEDIN and the Kingdom Lou-Lan”,
and Tokyo Geographical Society

Taiji YAZAWA

中央アジア・チベットの探検調査、なかでも、当時の世界地図上では空白のまま残されていたトランス・ヒマラヤ地域の地図作製、ロプ・ノール、いわゆる“さまよえる湖”、の実態の解明、失われた都市“楼蘭”の発見・発掘など、に不朽の成果を収め、しかも東京地学会との縁も深い Sven HEDIN (1865-1952) にかかる標記の展示会は、昨1988年10月の東京を振り出しに、以後、八尾・静岡・大分、そして最後の、1989年3月の福岡、などの諸都市で順次開催され、多くの観覧者を集めた。この展示会は朝日新聞社・日本対外文化協会の共催、スウェーデン国立民族博物館、スウェン・ヘディン財団（ストックホルム）、東海大学ヨーロッパ学術センターの特別協力で行われたものである。

HEDIN の中央アジア・チベット探検調査は、周知のとおり、第1次：1893～1897年、第2次：1898～1902年、第3次：1906-1908年、そして最も大規模の、第4次：1927-1935年（北西科学調査図）の前後4回（第1図）^{注1}に亘って行われた。標記の展示会では、彼のペルシャ旅行(1885, 1890)、第1次、第2次、第4次中央アジア探検、タクラマカン砂漠横断（1875）の際に HEDIN によって描かれたスケッチの絶品50数点^{注2}、彼の用いた探検調査用具・機械類、木簡・残紙等多数の出土品、“さまよえる湖”の原稿はじめ各種の手稿、若き日の彼の肉筆による地図類および彼の作製にかかる地図類^{注3}、タクラマカン砂漠横断および楼蘭発見当日、その他の日記、彼の書斎用具、主要な著書^{注4}、彼の業績を讀んで各国学会

等より贈られたメダルなど、HEDIN および彼の業績をしのぶにふさわしい多くの品々が、懇切な解説パネルとともに展示された。そのなかには日本での記念写真、東京地学会から贈られた、日本地図をかたどった金メダル（後述）なども含まれている。会場の様子などからみると、ロプ・ノール、楼蘭の遺跡などには特に観覧者の多くの関心が集まったように見受けられたが、それはそれとして、地理学の泰斗ベルリン大学教授 von RICHTHOFEN の高弟の1人であり、偉大な科学的探検者である HEDIN の生涯・業績などの全体像を展望、理解するうえでのよい機会でもあった。またある意味では、HEDIN の日本招待を計画、実施した、往時の東京地学会の先学を偲ぶようであったともいい得るであろう。

1908年、第3次中央アジア・チベット探検調査を終えてインドに出た HEDIN は、東京地学会からの招待を受諾し、同年10月、ボンベイ港を発ち、上海・長崎・神戸・清水等を経て、11月12日横浜港到着、以後、12月12日、大陸経由での帰国の途につくまでの在日期間は1カ月に及ぶ。その前半は、東京地学会主催の各種行事を初め、朝野を挙げての歓迎行事にまこと寧日なく、また後半は中京、関西方面に在って、歓迎行事のほか、古き日本文化に触れる充実した日程が用意された。

HEDIN の日本招待にかかる東京地学会の対応、歓迎行事、公開講演等については当時の地学雑誌^{1)・4)}、あるいは協会出版物^{5)・6)}などに詳しく記され、それに拠って、当時を伺うことができるし、

* 東京地学会 Tokyo Geographical Society

第1図 HEDIN の探検ルート（ヘディン（1964）：中央アジア探検紀行全集，白水社刊，の見返し図による）

また、いまとなつては、それ以上の資料を求めることも困難であろう。しかし、東京地学協会にとっては勿論、当時の日本の学界にとってまことに意義深いものがあつた協会の HEDIN 招待は、何分にも80年余りも以前のことであり、当時の地学雑誌、あるいは協会出版物などは、その収蔵に限られているために、誰れでもすぐ手にすることができ、状況には必らずしもない恨みがある。そこでこの機会に、上記資料等を参考として、東京地学協会による HEDIN の日本招待の、協会自身およびわが国の学会などにおける受けとめかたを中心に簡単に述べてみたい。

この HEDIN 招待は、東京地学協会の国際交流事業の一環として、計画、実施されたものであつたといえよう。想うに協会創立初年度に当たる1879年の NORDENSKJÖLD 一行の歓迎招待⁷⁾、創立10年目に当たる1908年の HEDIN の招待、の何れもが東京地学協会の事業として行われたこの事實は、当時、国際学術交流を進める民間機関として、東京地学協会が極めて重要な役割りを担って

いたことを端的に示すものであろう。尤も、前者は創立後僅か4カ月余りで、まだその基礎も固まらない東京地学協会が、NORDENSKJÖLD 一行を乗せた Vega 号の横浜到着を目前にした1879年8月末に、ドイツアジア協会からの共催の働きかけを受け入れて、9月15日、東京地学協会・ドイツアジア協会・イギリスアジア協会3者共催のもと、工部大学校（東大工学部の前身）を会場にして行われたものである。この北氷洋周航は全世界から注目された偉業ではあつたが、事情^{注5}があつて、NORDENSKJÖLD または代人による、学術講演は行われることなく、内容的には一行の盛大な歓迎宴および夜会にとどまった^{注6}。これに対して後者は、東京地学協会によって計画、実施されたものであり、協会主催の歓迎会、送別会などの儀礼的行事にとどまらず、多くの聴衆に多大な感銘を与えた、中央アジア探検についての HEDIN の公開講演会も行われた。これは、創立10年にして、協会の基礎が次第に固まり、独自の役割りを果たすまでになったことを物語つていよ

う。

ところで、上記した Vega 号による北氷洋周航に成功した NORDESKJÖLD 一行は、日本での大歓迎を受けた後、インド洋、大西洋經由により、1880年4月、ストックホルムに無事帰着する。出港以来約2年、帰国した一行は、港を埋める大観衆の熱烈な歓迎を受けた由であるが、その大歓迎振りを小高い丘から、両親とともに眺めた1人の少年があった。彼はこの光景に深く感動し、将来、探検家としての途を進もうと決心したという。その少年こそ、それから約30年後、己もまた東京地学協会から招待されて来日することになる Sven HEDIN その人の若き日の姿であった⁷(金子監修 1988, 124-125)⁹⁾。

さて、前記の資料に拠れば、東京地学協会は、第3次中央アジア・チベット探検中の HEDIN を、その探検の終了後、日本に招くことを計画し⁸、1908年3月、文部大臣牧野伸顕を介して、駐日スウェーデン公使 WALLENBERG に、日本招待の受諾の意志の有無を HEDIN へて照会するよう要請した。同年9月、チベットからインドに出た HEDIN より、招待受諾の内意が伝えられた東京地学協会は早速、協会を挙げて委員会⁹を組織して準備を進めるとともに、各方面に協力方呼びかけをする。その際配布された HEDIN 歓迎の趣意書には、前後3回に亘る HEDIN の中央アジア・チベット探検の成果を偉業と評価し、これを長大な文意によって紹介するとともに、その末尾を次のように結んでいる(地学雑誌第246号、1909、付録 p. 5)。すなわち

スエン・ヘディン氏カ前回ノ紀行書¹⁰ヌラ、之ヲ欧米11ヶ国語ニ翻訳セラレ、西洋ノ各学会競フテ賞牌ヲ贈リシニ係ラス、今回更ニ又偉大ナル探検ヲ亜細亞大陸ニ成就セシニ当リ、之ヲ歓迎スルハ我国ノ当然務ムヘキ所ナリトス。是レ本会ノ、氏が帰欧ニ先ンシテ、特ニ日本ニ招待シ歓迎セントスル所因ナリ。

趣意書ということもあろうが、協会の役割りについで意気込みが込められた文章であるように見受けられる。

HEDIN が横浜に到着して以後、11月27日夜西

下するまで、殆んど連日のように歓迎行事が行なわれたが、最も多かったのは東京地学協会関係のものであった。それは次のようなものである。

11月13日、東京地学協会総裁閑院宮表敬訪問、東京地学協会表敬訪問

11月15日、HEDIN 接迎式(協会会館)。HEDIN を協会名誉会員に推薦。また東京地学協会記念賞金牌贈呈。

歓迎晩餐会(華族会館 19~23時)、出席者53名¹¹。

11月19日 協会主催公開講演会(神田青年会館 18:40~22:30)、山崎直方通訳。聴講会員70、新聞記者50、一般聴講者660名。

11月22日 協会総裁閑院宮招待午餐会、宮邸での講演会、茶会。招かれた会員38名(このときの記念写真は東京地学協会に保存されている)。

11月24日 東京地学協会茶会(上野精養軒)。

HEDIN 送別晩餐会(紅葉館 18:30~22:30)。出席者52名。

当時の状況を伺う資として、1908年11月15日に行われた HEDIN 接迎式における会長代理菊池副会長¹²の挨拶と HEDIN の答辞、および当夜の歓迎晩餐会の席上での会長代理の歓迎の辞と HEDIN の答辞を次に転載する(地学雑誌第246号、1909)。

1908年11月15日、東京地学協会会館で行われた HEDIN 接迎式典での菊池会長代理挨拶

スエン・ヘディン博士！東京地学協会ハ本日茲ニ博士スエン・ヘディン君ヲ歓迎スルノ光榮ヲ有ス。博士ノ亜細亞内部ニ於ケル15年間ノ科学的探検ハ吾人ノ常ニ最大ノ興味ヲ以テ注意セル所ナリ。今回博士幸ニ本会ノ招請ヲ容レテ本邦ニ来遊セラル。吾人ハ博士ヨリ親シク其探検ノ事績、殊ニ其最近発見ノ成績ヲ第一ニ聴聞スルヲ得ルハ吾人ノ特ニ誇リトスル所ナリ。吾人ハ此機会ヲ以テ博士ヲ本会名誉会員ニ推薦シ、博士ノ偉大ナル功績ヲ頌揚スルノ微意ヲ表セントス。而シテ君ノ此推薦ヲ容レラレタルハ本会ノ榮トスル所ナリ。即チ茲ニ本会名誉会員章ヲ贈呈セントス。

スエン・ヘディン博士！本会ハ博士ノ亜細亞

写真 1 東京地学協会 HEDIN接迎式 (1908年11月15日 東京地学会館にて)

菊池副会長より東京地学協会記念賞を受ける HEDIN。その右に列なるのはスウェーデン公使並びに公使館員。

内部未知地方ノ探究ニ対シ其功績ヲ顕表センカ為メ特ニ記念賞牌ヲ調製セリ、即チ茲ニ之ヲ贈呈セントス。

HEDIN の答辞

東京地学協会会長代理菊池男爵閣下、各閣下及会員並ニ来会者諸君！予ハ本日此名誉アル貴協会ノ招待ニ応シ諸君ト相会スルヲ喜フト同時ニ過分の賛辞ヲ貴協会会長代理菊池男爵ニヨリテ叙述セラレタルヲ深謝シ、爰ニ聊カ日本来遊ノ意思ヲ開陳スルノ光荣ヲ有ス。

予ノ今回ノ探検ヲ終リ印度ニ出ルヤ実ニ多数ノ書信ニ接シ、特ニ欧州各地ヨリ予ノ来遊ヲ促シ講演ヲ求メルモノ尠ナカラズ。面シテ日本ノ招待亦其中ニ在リ。予ハ此光荣アル多数ノ招待ニ対シ東西何レヲ選ハンカヲ再三再四熟考シ遂ニ東方ヨリ来レル招待ニ応スルヲ以テ予ノ最大ナル榮譽ナルコトヲ確信シ、且ツ予ノ多年景仰セル貴國ノ風物並ニ敬慕セル名士ニ接スルヲ榮トシ、旅行ヲ急キテ今ヤ親シク諸君ノ聲咳ニ接スルニ至レルハ予ノ欣喜措ク能ハサル所ナリ。予ハ幼時ヨリ地理学ニ志シ、特ニ亜細亞、研究ニ対シ深キ趣味ヲ有シ、学歴ヲ重ヌル毎ニ益々之ヲ深クセリ。予ノ学業ヲ卒フルヤ直チニ亜細亞内陸探究ノ途ニ上リ、爾來二十有三年、一意此事業ニ従事ニ従事シ、此間諸種ノ材料ヲ得テ当

初目的ノ一部ヲ完成シタルヲ喜フ。今ヨリ2ヶ月前、予ハシムラン着シ本國並ニ欧米ノ各学会ヨリセル幾多ノ招待ヲ辞シ、貴協会ノ招待ヲ榮トシ貴國ニ来遊セルニ、図ラスモ名誉会員ニ推薦セラレ金牌ヲ贈与セラル。実ニ謝スルニ辞ナシ。聞ク如クンハ、貴協会ノ金牌ヲ受クルモノ実ニ予ヲ以テ嚆矢トスト。予ノ光荣何物カ之ニ加ヘン。回顧スレハ紀元1878年4月29日^{注13}、即チ予ノ小学校在学中、弊國ノ先輩 NORDEN-SKJÖLD 博士北東航路ノ探検ヲ畢ヘテ貴邦ニ来着スルヤ、貴協会ノ盛大ナル儀式ニヨリ銀牌ヲ贈与セラル。其帰國スルヤ弊國ノ官民狂喜シテ之ヲ歓迎セリ。予ハ親シク其狀況ヲ目撃シ、益々亜細亞内陸探検ノ意切ナルヲ加ヘ、彼ノ銀牌ヲ見ル毎ニ常ニ激励セラレタリ。図ラサリキ、予今貴協会ニ於テ先輩ニ優レル盛大ナル歓迎ヲ受ケ、且ツ銀牌ニ代ユルニ金牌ヲ以テセラレントハ。実ニ予ハ先輩ノ偉大ナル切績ニ及ハサルコト遠ク、而モ今日ノ優遇ニ接シ殆ント謝スル所ヲ知ラス。又貴協会ハ福島將軍ノ少佐タリシ時、西比利亞單騎旅行ヲ企テ、中外ニ其名聲ヲ発揚シ、万里ノ遠征ヲ果シテ帰朝セラルルヤ、特ニ賞牌ヲ贈与セラレタルヲ聞ク。而シテ予ノ貴協会ヨリ賞牌ヲ贈与セラレタル前後3名ノ1人ニ加ヘラレタルヲ深く光荣トスル所ナリ。由来日本人種ハ愛國心に富ミ武勇ヲ以テ聞ユルノミナラス、學術上各種ノ方面ノ研究ニ於テモ卓越ナル智識ヲ有セリ。貴國ノ大谷伯爵ノ如キ、成田安輝、河口慧海氏ノ如キ、予ノ中央亜細亞及西藏ニ入ラサル前、既ニ之ヲ踏査ヲ終ヘ、社会及學術上ニ与ヘタル功績大ナルモノアリ。予ハ是等諸氏ノ驥尾ニ付シテ聯カ其目的ヲ達シタルニ過キス。然ルニ今回東京地学協会名誉会員ニ推薦セラレタルハ予ノ衷心大ニ誇トスル所ニシテ終生忘ルル事ナカルヘシ。終リニ臨ミ予ハ各方面ニ亘リ常ニ一大成功ノ端緒ヲ開カルル日本國官民上下ニ向ッテ今後ノ親交ヲ祈リ、予ノ畢生ノ目的ナル不完全ナル亜細亞ノ地図ニ確實ナル修正ヲ加フルノ事業ニ関シ直接間接ノ援護ヲ与ヘラレントヲ請ヒ、茲ニ閣下、会員並ニ參列者諸君ニ対シ本日ノ光荣ヲ感謝ス。

第2図 HEDIN のトランスヒマラヤのスケッチ

第428号幕営地点より Poru-tso (ボル湖) を隔てて、トランスヒマラヤ山脈を望む
(1908年6月13日 HEDIN 描)¹²⁻¹¹

11月15日夜、華族会館において行われた HEDIN 歓迎晩餐会における 協会々長代理菊池副会長の挨拶

東京地学協会ノ副会長トシテ、今夕、名誉アル主賓 HEDIN 博士ノ健康ヲ祝スルハ予ノ最モ愉快ナル責務ナリトス。HEDIN 博士ハ中央亜細亜探検ノ大事業ト、及ヒ其ノ著書ニヨク已ニ世ニ知悉セラレタリ。然ルニ今回親シク博士ノ風貌ニ接スルノ機会ヲ得タルハ吾人ノ最モ快トスル所ナリ。実ニ博士ノ来訪ハ本邦地学研究上ニ多大ノ資料ヲ供給シ、其東京及京都両帝国大学ニ於テ開催セラルル講義^{注14}ハ学生ニ至大ノ感動ヲ与ヘ、之ガ為ノ博士ノ後ヲ遂ヒテ起ツモノアラン。

博士ヤ3年間中央亜細亜ノ寂寥ナル地方ヲ探検セラレ、帰心矢ノ如クナルニモ拘ハラヌ、本会ノ招請ニ応シテ来周セラレタルハ吾人ノ実ニ欣喜ニ堪ヘサル所、而シテ博士ノ来訪ハ本邦ト瑞典国トノ間ニ現在スル親善ナル関係ヲ一層鞏固ニスルハ予ノ信シテ疑ハサル所ナリ。

協会副会長歓迎の辞に対する HEDIN の
答辞 (英語)

閣下並ニ諸君! 予ハ今夕日出国ノ各階級、各学科ヲ代表セラルル諸君ヨリ盛大ナル宴席ニ招待セラルルノ榮ヲ得、東京地学協会ノ代表者タル菊池男爵ハ予ニ対シ熱誠ナル歓迎ノ辞ヲ述ヘラレタリ。予ハ自ラ当ラスト雖モ、茲ニ一言謝辞ヲ述ヘントス。予ハ憐ムヘキ形影相弔フ一箇ノ亜細亜巡礼ニ過キス、其20余年来ノ希望ハ此日本国ノ土テ踏マントスニ在リ。然ルニ西藏ヨリ出テテ、計ラスモ此名声隆々タル日本国の科学ヲ代表セラルル東京地学協会ノ懇篤ナル招請ヲ得タリ。是レ実ニ予ノ常ニ東方ニ向ヒテ鶴首嚮

望セシ所、西方諸国ノ招請ト郷里ノ帰心トノ如キハ此東方ノ引力ニ対シテハ全ク何等ノ力ナキナリ。予ハ上海ニ、長崎ニ、神戸ニ、横浜ニ、至ル所諸君ノ出迎ヲ受ケ^{注15}、船ノ清水港ニ入ルヤ銀ノ如キ八咫ノ芙蓉峰亦笑ミテ含ミテ予ヲ迎ヘタリ。

其横浜ニ着スルノ時、天明雲現ハレ芙蓉峰の美姿ヲ隠シタリト雖モ、更ニ旭日東天ニ懸リテ氣自ラ状快ニ、芙蓉峰ハ朝暾ニ促サレテ復ヒ高ク雲際ニ現ハレ、誠ニ予ノ来遊ヲ欲フモノノ如ク、陸ニハ花中の主トモ称スベキ菊花、黄金ノ如ク、亦予ヲ迎フルニ意アルカ如シ。実ニ其国土、其人士悉ク予ヲシテ深く感激ト驚嘆ノ情ニ堪ヘサラシム。而シテ本席ニハ各科学ヲ代表セラルル諸君ノミニシテ、予ノ専攻ニ属スル地理学ノ如キ其教科書ニハ日本国学者ノ名其首位ヲ占ム。地震ノ如キハ其好例ナリトス。予ハ茲ニ此盛会ヲ催サレタルニ対シ満腔ノ謝意ヲ表スルニ辞ナク、此意之ヲ語ルニ由ナシ。請フ、之ヲ推シ之ヲ了セラレンコトヲ。予ハ東京地学協会及此協会ト共ニ、地理学及各種、科学ヲ代表セラルル諸君ニ対シテ敢テ一言謝辞ヲ述フ。

1908年11月19日夕、神田青年会館で行われた東京地学協会主催 HEDIN 講演会においては、彼は参集した多数の聴衆を前にして、2時間ほどに亘って、彼のペルシャ旅行、第1次～第3次中央アジア・チベット探検、特に第3次探検を中心に講演⁶⁾し、山崎直方がこれを1時間ほどに要約、さらに HEDIN は多数の実物幻燈写真によって、探検の状態、中央アジアの地形、風俗、習慣等を詳細に説明、山崎直方はまた、これを逐一通訳し、大いに聴衆を感激させた由である(地学雑誌第246号付録, p.20)。この講演を直接聴講した辻

村 (1969, p. 206)¹⁰⁾、田中 (1969, p. 202)¹¹⁾等の手記には、たいへん感銘深講演会であったことが記されている。なお、このときに使用された地図類はその後、東京地学協会に保存され、貴重な資料として残っていたが、惜しいことに関東大震災の際、会館の全焼によって、烏有に帰してしまったという (辻村 1969, p. 206)¹⁰⁾。

東京地学協会による HEDIN 招待は、協会以外に対しても多くの恩恵をもたらした。単なる歓迎行事だけではなく、数多くの HEDIN 講演会が各地で行なわれた。東京帝国大学では2回に亘って、超満員の聴衆を集めて学内講演会が、また京都帝国大学でも学内大講演会1回が⁹⁾、また京大主催公開講演会1回が、それぞれ催された。その他に、HEDIN の訪問を機に、早稲田大学、慶応義塾、東京高等師範学校等での講演、関西では仏教大学学内講演、大阪市主催講演会なども行われた。僅か1カ月ほどの滞在中の、主なるものを挙げただけでもこれほど多くを算える^{注16)}。わが国を訪れた科学者で、HEDIN ほど多くの機会に、さまざまな聴衆を前に、己の精根を込めた調査研究の成果を置土産として残していった科学者は見当たらないのではないかな。なお HEDIN は、離京に先立って、11月25日、勲一等瑞宝章を受章し、翌11月26日には、スウェーデン公使に伴われて参内し、中央アジア探検に関する明治天皇からのお質ねにお答をしている。

東京地学協会の国際交流事業は、HEDIN 招待事業^{注17)}を皮切りに、ベルリン大学 A. PENCK (1909)、ハイデルベルク大学 A. HETTNER (1913) を初め、来日した多くの碩学の他に、エクスパート等との交流、国際学術会議への参加^{注18)}、世界の代表的学協会との交流^{注19)} などへと進展していった。これは当時のわが国の学界においては出色の活動であり、国際学術交流の担い手として、その創立以来、東京地学協会が果たした貴重な役割りの一端を示すものでもある。これらの事業は、東京地学協会による中国現地調査 (1912~1921) とともに、若き地学協会の収めた大きな成果として評価され、記憶され、更には指針とされるべきものであろう。それにつけても、当時の先学の見識と努力に改めて深い敬意を表したい。

注

- 注 1 HEDIN の第4次探検調査 (1927年~) は財政難のため、1933年に解散せざるを得なくなったが、南京政府の委嘱による自動車路建設の下見調査として、1933年~1935年 (第1回の第5次) は継続された。しかし、本稿では、1927年~1935年を第4次探検調査として扱う。
- 注 2 乾燥地形、トランス・ヒマラヤ、探検隊、遺跡、いく先々の人々など多彩。
- 注 3 HEDIN は地図描画の技に秀いで、すでに若き日、多くの地図類の描画を依頼されたという。なお、多くの展示図のなかにはロブ・ノーラー帯の地図もある。
- 注 4 *Genom Khorasan och Turkestan*. Stockholm 1890-91, 2vols; *Mitt livsom upptäcktsresande*. Stockholm 1930. 5 vols; *Den vandrande sjön*. Stockholm 1937, その他。
- 注 5 この歓迎晩餐会共催の3学協会関係者にはスウェーデン語を解する者がなく、また、NARDMSKJÖLD の側にとってはスウェーデン語以外での用語による講演の万全の準備のための時間の余裕がなかったことから、講演は行われないこととなったという (渡辺洪基 1879, p. 1)⁹⁾。
- 注 6 詳細は“北氷洋周航瑞典汽船ヴェガ号乗組士官饗応記事。東京地学協会報告、第1年、第4号、1879, 22P.”にある。
- 注 7 1908年11月15日 HEDIN 接迎式における東京地学協会会長代理の挨拶に対する HEDIN の答辞参照 (後述)。
- 注 8 「ヘディンを日本に招こうと最初に発案したのは西本願寺法主大谷光瑞であった。現在ヘディンの未発表資料の中に入っている発信年号を欠く電報があるが、多分1908年9月18日京都からインドに打電したものらしい。“スウェーデン・ヘディン博士宛「シムラ」。長き高信ナキノチ、無事ゴ到着ヲ祝ス。地学協会ト協議ノ末、博士ヲ日本ニゴ招待イタシタシ。大谷光瑞」がこれである” (金子民雄監修 1988, p. 146)⁹⁾。
- 注 9 依嘱された21委員の氏名、分担表によれば庶務会計は井上禧之助担当。なお接待係は大森房吉主任のもとに、猪間牧三郎・堀賢雄・小川琢治・田中阿歌磨・中村清二・山上萬次郎・山崎直方・佐藤伝蔵・志賀重昂・神保小虎・白鳥庫吉のそうそうたる士が名を連ねている (地学雑誌 第246号, 1906, p. 6)。

注10 *En färd genom Asien* 1893-1897. Stockholm 1898, 2 vols. を指すのだろうか。

注11 この歓迎晩餐会への招待状発送先はスウェーデン公使、同公使館付武官、同領事、内閣各大臣、東京帝国大学総長、同各分科大学長、帝国学士院長、同部長、同幹事、陸軍参謀総長、同次長、海軍軍令部長、同次長その他(地学雑誌 第246号 1909, p.15)。これなどは当時の東京地学協会の social status の一端を示すものか。

注12 東京地学協会会長榎本武揚は Hedin 来日の直前の1908年10月26日に逝去、当時会長は空席のままであった。会長職は菊池大麓、花房義質両副会長が代行した。

注13 1878年4月29日は HEDIN の記憶違いか、記録の誤りか、それとも誤植かであろう。東京での NORDENSKJÖLD の一行の歓迎会は1879年9月15日、また一行のストックホルム帰着は1880年4月20日であろう。

注14 HEDIN 歓迎行事の一環として、東大、京大での学内講演が行われる予定について言及したものであろう。前者は11月16日、17日の両日に、後者は11月29日に、それぞれ催された(東京地学協会の公開講演ほど平易ではないが、内容的にはそれとほぼ同じもの)⁶⁾。

注15 大谷光端から、HEDIN 出迎えのために上海まで派遣された堀 賢雄に、東京地学協会からも協会代表を委嘱。同様に、神戸港に HEDIN を出迎えた山崎直方(東大派遣)、小川琢治(京大派遣)に東京地学協会からも協会代表を委嘱する。なお山崎直方、堀 賢雄は横浜まで HEDIN と同船する。さらに横浜港には大森房吉、井上禧之助、菊池大麓、徳川頼倫、小川琢治、脇水鐵五郎、山上萬次郎、福地信世などの他に桜井錠二、小藤文次郎などが出迎えている。遠来の賓客に時する心遣いがよく伺がわれよう。

注16 この他に、文部大臣、外務大臣*、東京帝国大学総長、陸軍参謀総長、志賀重昂、徳川家建、京都帝国大学総長、京都市長、大阪市長主催はじめ数多くの、HEDIN を主賓とする午餐会、あるいは晩餐会が行なわれている。なお HEDIN は寸暇を割いて東京帝国大学地質学・考古学・地震学・植物学各教室・植物園、南葵文庫、大倉美術館などを、また関西では多くの文化遺産を訪れている(*11

月6日夜の小村寿太郎主催晩餐会の記念写真が東京地学協会に保有されている。)

注17 HEDIN 招待事業の収支決算報告書に拠れば、収入の8割余が個人寄付、あとは宴会会費、講演会収入がそれぞれ1割弱ずつとなっている。講演会は有料であったのか。何れにしても経費のほとんどが個人寄付(そのなかには三井八郎右工門、徳川頼倫、岩崎久彌、古川虎之助、徳川家達等の大口寄付が含まれる)で賄われていることは、基礎に次第に固まりつつあったものの、財政的には東京地学協会はその基盤が未だ強固ではなかったことを示すものであろう。

注18 例えば第11回万国地質学大会(スウェーデン、1910)に東京地学協会代表(井上禧之助)参加。第3回汎太平洋学術会議(日本、1926)に参加、出品。

注19 例えば Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin 創立100年祭(1928)に東京地学協会代表(山崎直方)が、また Royal Geographical Society, London 創立100年祭(1930)にも協会代表(堀 義貴)が参列している。

参考文献

- 1) スエン・ヘディン氏招待概記[東京地学協会記事]。地学雑誌 第20年(第240号)、1908, 865~868.
- 2) 山崎直方: 将に來らんとする大探検家スエン・フォン・ヘディン氏。地学雑誌, 第20年(第239号)、1908, 757~785 (これは HEDIN 来日の直前の、1908年10月20日、東京地学協会例会講演)
- 3) ドクトル・スエン・フォン・ヘディン氏歓迎報告。地学雑誌, 第21年(第246号)付録, 1909, 31p.
- 4) ヘディン博士滞洛記事。地学雑誌, 第21年(第246号)付録, 12p.
- 5) スエン・フォン・ヘディン氏小伝。地学論叢, 第4輯(ヘディン号), 1909, 14p. (山崎直方の筆になるものと推定される)
- 6) スエン・フォン・ヘディン氏講演。地学論叢, 第4輯(ヘディン号), 1909, 114p. (東京地学協会会長鍋島直大の序文に拠れば、この“講演”は、東京地学協会講演、および東京・京都両帝国大学における学内講演の内容を山崎直方が記述したものとする。)
- 7) YAZAWA, T. (1981): A. E. NORDE-NKJÖLD and the Tokyo Geographical

- Society. 地学雑誌 90 (1879), 51-53.
- 8) 渡辺洪基 (1879) : ウェガ号北氷洋周航記事. 東京地学協会報告, 第1巻, 第4号, 協会記事 30p.
- 9) 金子民雄監修 (1988) : スウェン・ヘディンと楼蘭王国展. 日本対外文化協会, 186p.
- 10) 辻村太郎 (1969) : スウェン・ヘディンの講演と豆南諸島学術調査. 地学雑誌, 78, 東京地学協会90年史, 205~207.
- 11) 田中 薫 (1969) : 東京地学協会と父と私. 地学雑誌, 78, 東京地学協会90年史, 200~203.
- 12) HEDIN S. (1909) : *Transhimalaya Upptäckter och Äfventyr i Tibet*. Stockholm, I, 665 p. ; II 593 p.
(1989年2月7日受付, 1989年2月27日受理)